

中国とインドの経済成長と世界各国間の所得格差

－1950年から2030年－

大阪経済大学 福本 幸男

20世紀後半の世界各国間の所得格差は、国別の人口のウェートを考慮していない場合には拡大しており、考慮した場合には拡大していない。両者の違いは中国经济の急成長をどう評価するかが影響していることが明らかになっている。本稿は、中国とインドの経済成長に着目して、近い将来である2030年の世界各国間の所得格差が拡大するかどうかを検証した。

1950年から2008年の世界各国の人口と1人当たりGDPのデータに基づいて得られた検証結果は以下のとおりである。(1) 世界各国間の所得格差は、人口ウェートを考慮しないにかかわらず、1950年時点と比べてほぼ同じ割合だけ拡大している。(2) 中国は人口ウェートを考慮した世界各国間の所得格差の拡大を抑えることに貢献しなくなる一方で、インドは重要な役割を果たすこととなる。

これらの結果は、20世紀後半に限定した世界各国間の所得格差の動向とは大きく異なっている。検証結果から、以下の2つの指摘ができるだろう。第1に、20世紀後半に見られる人口ウェートを考慮するかしないかによる世界各国間の所得格差の動向の違いは一時的な乖離にすぎない可能性がある。第2に、インドが逆U字パターンに当てはまらない経済発展をすることで、中国に代わって、国家間の所得格差に影響を与える可能性がある。